

宇宙は何からできている?

初期の哲学者たちは自分の周囲の世界を考察し、そこに存在する事物はなんらかのものからできているはずだと考えました。その最初の問い、「世界は何からできているのか?」が、形而上(けいじょう)学という哲学の主要部門のはじまりでした。形而上学は、存在するとはどういうことか、存在の本質は何かということに関わる哲学です。

宇宙をつくる物質

ギリシアの沿岸植民市ミレトス(今のトルコ西部)が、私たちの知っている最初期の哲学者たちの生まれ故郷です。そのひとり、天文学者、技師でもあったタレスは、この世界は何からできているのかという問いにひきつけられ、驚くべき理論を考え出します。あらゆるものは、たったひとつの物質、水から成り立つと考えたのです。水はどんな生命にも不可欠である、陸地は海から出現するように見える、水は液体・気体・固体というさまざまなかたちで存在する、ゆえにあらゆるものは、なんらかの存在形態をとった水からできているにちがいない、と推論したのです。タレスは自分の新しい哲学的観念を他の思想家たちに教え、弟子だっ

生き続けるアイデア

初期ギリシア哲学には恒久的な影響力があった。エンペドクレスの4つの基本的元素という考えが進化して、現代化学となり、「元素」という用語を今も使っている。現代物理学の考え方も用語も、原子論の粒子説と共通する。あらゆるものが究極的にはひとつの物質から成るという主張までもが、すべての物質はエネルギーであるというアイデアとなって、現代物理学によりみえた。

たアナクシマンドロスは、地球を支えるのが水だとしたら、水を支える何かがあるはずだと指摘しました。アナクシマンドロスのあとにもさらに哲学者たちが続き、新説を提唱していきます。たと

**万物は
水からできている。**

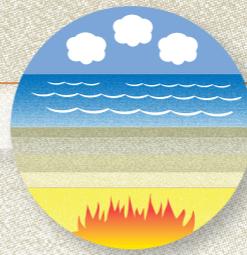
ミレトスのタレス

えばアナクシメネスの説は、地球は空気中に浮かんでいるのだから、空気が宇宙でただひとつの物質だということでした。

何かがある状態と、何も無い状態

初期の哲学では、宇宙は究極的にはひとつの「実体」から成ると考える一元論が優勢でした。一元論と一緒に、宇宙の根本的な性質は何か不変のものであるという考えが現れました。パルメニデスという哲学者の主張によると、何かが存在すると同時に存在しないというものはありえないのだから、何も存在しない状態はありえない——「無」などというものは無い。ゆえに、存在するものが無から生じたはずがない——存在するものはずっ

……それとも4元素か……



……あるいは無数の微粒子か?



宇宙を
構成するのは……

……ひとつの物質か……

① 1か4か多数か?

初期の哲学者たちは、宇宙はすべて水からできている、あるいは4元素からできている、あるいは微小な原子からできている、と推論した。そうした初期のアイデアは、今でも議論の対象となっている。

ある、と提唱し、それらを「元素」と呼びました。火、水、地、風の4元素です。元素自体は不変だが、4元素がさまざまな割合で結合して世界のいろいろなものになり、その結合は絶えず変化する、というのです。また、デモク

タレスは日食をびたりと予測した。どうしてそんなことができたのか、今でもわかっていない。

リトスとレウキッポスの考案した、「原子論」もあります。あらゆるものは、原子という、きわめて小さくて不変の、それ以上分割できない粒子からなるという説です。それによると、原子がか

らっぱの空間を自由に動きまわり、互いに結合しあって、この世界で私たちの目に見えるさまざまな実体をかたちづくりします。実体が死んだり朽ちたりすると、原子は再結合して新しい何かをかたちづくるのです。

と存在してきたはずであり、無になることもまたありえない以上、これからも常に存在するだろう、というのです。すると、どこにも「無」がないので、宇宙は何かで満たされているにちがいません。その「何か」が、不変でしかも永遠の、ひとつの「実体」なのです。

元素と原子

宇宙の本質は根本的に不変だというパルメニデスの主張とは違う意見をもつ哲学者たちもいました。そのひとり、エンペドクレスは、この世界で私たちが目にするのできる多種多様な事物も、また、世界が絶えず変化しているように見える理由も、パルメニデスの理論では説明しきれないと考えました。そして、実体はひとつではなく4つ

**原子とからっぱの空間以外には、
何も存在しない。
その他のものはすべて
単なる「考え」にすぎない。**
デモクリトス